

越谷市袋山中組の嫁講について

須藤賢一

越谷市袋山の中組で、平成十九年（二〇〇七年）まで続いた「嫁講」（よめこう）で、最後まで活動していた三人の女性に、当時の様子を聞き取り調査した。今では越谷市から姿を消した「嫁講」の貴重な体験談をまとめた。

はじめに

聞き取り調査概要

聞き取り調査は、二〇二三年十一月十四日と十二月十九日の二回にわたって行なった。話をうかがったのは、Hさん（八十六歳）・Mさん（七十六歳）・Aさん（七十三歳）の三人。取材場所は袋山の旧家・Hさんの自宅。

三人とも袋山在住。聞き取り調査は録音し、後日、論考としてまとめて発表する旨を承諾していただいたうえで取材した。三人の希望で名前は匿名にした。

嫁講とは

嫁講（よめこう）とは、農村集落に嫁いだ「嫁」たちの集まりのこと。『越谷市史 第一巻』(1)によると、越谷市域では、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念仏講など、女性の講組織が旺盛だった、という。

(1) 『越谷市史 第一巻』越谷市（昭和五十年三月三十日発行）一三三八頁

袋山地区の嫁講

また、袋山地区の嫁講について、昭和五十五年（一九八〇年）に発行された『袋山の歩み（上）』(2)には、次のように記されている。カッコ内は筆者注。

遠い昔から日本中の農家は毎日がきつい力仕事に追われていました。／この袋山もいまから約三十年くらい前（昭和二十五年／一九五〇年）ごろまでは純農村でしたから、とくに各家々のお嫁さんの立場は心身ともに毎日がたいへんでした。／そのため毎月一回集会所に集まり、昼、夜の二回会食しながら談笑にふけったり、ゆっくり休養したのが始まりであり、目的でした。／ただ下組と上組のほかに中組があつて、場所は薬師堂を使っています。この嫁講のメンバーは各農家のお嫁さんが主体ですが、最近ではその分家の人々も入っているようです。

以上を踏まえたうえで、平成十九年(二〇〇七年)まで越谷市袋山の中組で行なわれていた「嫁講」の実態について報告する。

越谷市袋山・中組の嫁講

聞き取り取材の質問に対しては、三人の中で、最年長者であり、嫁講の在籍期間が四十七年間と、いちばん長かったHさん(八十六歳)に答えていただき、Mさん(七十六歳)とAさん(七十三歳)が話をつけ加える、という形をとった。

◆三人の出身地を教えてください。

(Hさん、以下、H) わたしは春日部の河辺村中野(現在の庄和町中野)の生まれで、二十歳のとき、昭和三十三年(一九五八年)に、お見合いで、ここ(袋山)に嫁いできました。(Mさん、以下、M) わたしは生まれも育ちも袋山です。(Aさん、以下、A) わたしは栃木県の市貝村(いちかいむら)から袋山に嫁いで来ました。

◆嫁講の呼び方は「よめこう」でいいんですか？

(H) わたしたちは「ヨメコ」と呼んでいました。

◆結婚した女性は全員、嫁講に入るんですか？

(H) そうだね。だいたい、嫁に来て、二、三年で入ったね。わたしは長男が生まれる少し前、二十三歳のとき(昭和三十五年)に入ったかな。近所のお嫁さんたちもだいたいヨメコに入ったから、おばあちゃん(夫の祖母)が、「ウチも入れなくっちゃ」と言っって、入りました。

(M) わたしは、姑(しゅうとめ)がヨメコを抜けて中年講に入ったので、入れ替わりで、四十代のときにヨメコに入りました。昭和から平成に替わったころだったかな。

(A) わたしも、姑が中年講に入ったので、四十代でヨメコに入りました。昭和ではなく平成になっていました。

(H) ヨメコに入れるのは一家にひとりだから、嫁に来ても姑がヨメコに入ってるときは、嫁はまだヨメコには入れません。姑がヨメコを抜けて(その上の)中年講に入ると、嫁はヨメコに入れました。^③

(3) 中年講の上には（おばあさんたちの）念仏講があり、おばあさんが亡くなると、中年講に入っていたその家の姑が入れ替わりで念仏講に入った。

◆お三方は袋山のどの地区の嫁講だったんですか。

(H) わたしたちは、袋山の中組ね。袋山には、上組・下組・中組がありました。

◆中組の嫁講には何人ぐらいいたんですか？

(H) そうね、十五、六人いましたね。

◆どのくらいの頻度で行なっていたんですか？

(H) 月に一回。曜日は決まっています。当番の人が、都合のいい日にやりました。

当番が各家を回って、参加の有無を聞いて、参加者からはお米を五合いただいてくるんですよ。子供を連れてくる家（うち）からは、子供ひとりにつき、お茶碗に一杯、お米をもらってきました。

当番は、ふたり当番で、持ち回りました。最初のうちは、一年に一回ぐらいで、当番が回ってきましたが、だんだんヨメコの人数が減ってきて、しまいには、半年に一回ぐらいで当番をやっていました。維持費のようなものではありませんでしたね。

◆嫁講は当番の家でやったんですか？

(H) 最初は薬師堂でやっていました。当時（昭和四十年ごろ）は薬師堂に留守居の夫婦が住み込みでいたんですよ。そこを借りてやっていました。薬師堂はそのころはもうかなり古かったですね。

嫁講をやっているあいだ、子供たちは外（境内）で遊んだりしてました。

その後、薬師堂を建て替えることになり、その間は、上組の観音堂を借りて、やりました。私が、四十いくつのころだったかな。

観音堂には煮炊きできる土間もあったので、当番が、ご飯を炊いて、味噌汁を作りました。近所に肉屋さんがあったので、おかずはコロッケが多かったかな。

そのほかに、自分たちがおかずを一品、持ち寄りました。

そうして、(昭和五十二年に)薬師堂が建て替えられたので、わたしたちのヨメコも再び観音堂から薬師堂に戻りました。新しい薬師堂は八畳二間で、煮炊きできる台所もありました。

(A) わたしは新しい薬師堂になってからヨメコに入りました。



薬師堂 昭和 52 年 (1977) 再建



観音堂 昭和 44 年 (1969) 再建

◆嫁講は一日ずっとやっていたんですか？

(H) お昼と夜の二回、やりました。

お昼は十二時に集まりました。それでお昼ご飯を食べて、三時ごろにお茶を出して、途中で、それぞれ家で夕飯のしたくがあるので、当番以外は、一度家に帰って、家のごはんの支度をすませてから、六時半ごろに戻ってきて、当番は早めに戻ってきて、ご飯を炊いて、味噌汁を作って、おかずは昼のものを食べました。

子供がまだ小さいときは、ばあちゃんが、ヨメコの日は、子供を家で寝かしつけてくれたりもしたね。

(M) 途中からは、七時ごろまでに会場に出前を持ってきてもらうようになった。

(A) 夜の部は九時ごろにはお開きになったかな。

◆当番はどんなことをやるんですか？

(H) 当番は朝から忙しいですよ。当番ふたりで、片方がご飯を炊いて、片方が味噌汁を作って、そのほかにそれぞれおかずを一品ずつ作って、それにおしんことを付けて、持っていきました。

当番がお膳の用意をして、ご飯をよそったら、「召しあがってください」と言って、始まり

ました。

最初のころは、夜もご飯を炊いていましたが、だんだんと近所にもお店（飲食店）ができてきたので、六十年前（昭和四十年）くらいかな、昼も夜も当番がやるんじゃないかな。うからと、夜は、各自実費で、そば屋さんに出前をとるようになりました。

そのうち、お店も増えてきたので、お寿司や釜飯なんかも（出前を）とるようになりました。

（M・S）わたしたちがヨメコに入ったとき（平成になってから）は、昼も夜もお弁当になっていましたね。

◆食事を作るのもたいへんだったでしょ？

（H）昼も夜も作るのはいへんだからってことで。最後はもう昼も夜も出前になった。作るのはいへんだからもうやめようと。出前を頼むときは当番が何にするかを決めた。お寿司にするか、そばにするか、釜飯にするか。

◆料理で印象のあるものはありましたか？

（H）きんぴらごぼう、芋の煮ところがしとかかね。あとは混ぜご飯かな。ヨメコの中に鶏を飼ってた家があって、そこが当番だと、オムレツを人数分作ってきてくれたりもしたな。

◆話の内容は？

（H）そうだねえ、だいたいが世間話や子供の話、身の上話だったね。それよりもさ、当時は（農作業や家事、子育て、おばあさんの世話などで）忙しかったから、とにかく（嫁講の日）は、休めた。それがいちばんだったな。

（M）うちの時代はグチも出たね。「ここで言ったことはナイショね」とか言って。うわさ話はしなかったですね。

◆リーダーはいたんですか？

（H）そういうのはいなかったね。年長者もいばらなかった。

（M）みんな仲がよかったよ。

◆楽しかったですか？

（H）楽しかったというか、休めたんだよな。あのころはさあ、今みたいに農家にはトラク

ターとかもないからね、それで朝から畑や田んぼをやって、忙しかったですよ。

それに、おばあさんの念仏講の日（毎月二十五日）はたいへんだったよ。当番の家の嫁が、（おばあさん講の）ご飯やおかずを作って、一日二回、持っていくんだから。

おばあさん講の人数分、おいなりさんを作ったときなんか、油揚げを六十枚ほど炊いて、たいへんだったよ。でもわたしも若いから動けた。

（M）上組と下組のヨメコはバスで旅行なんかも行っていた。わたしたちの中組のヨメコは地味だから、旅行には行かなかった。

（A）わたしは月に一回、みんなに会えるのが楽しかった。年長者の話が聞けるのもありがたかった。

◆昼と夜は違いがあるんですか？

（H）夜のほうが楽しかった。当時は、なんの遊びもなかったでしょ。

夜はさ、みんなで、あーでもない、こーでもない、いろんな話をした。お酒はでなかったな。好きな人もいたと思うけどな。嫁はさ、さすがに酔っ払って家に帰れないからね。酔って家に帰ったりしたら、そりゃたいへんだよ。「今どきの嫁は！」と、上様④に何言われつかわかんねえからな。

④上様（うえさま）とは、しゅうとめのこと。嫁講の間では、しゅうとめは「上様」と呼んでいた。

今はさ、そんなこともないんだろうけど、昔（六十年前）はさ、たいへんだったよ。おばあさんや姑たちいろんなことを言われるからさ、頭を切り替えていかなかったら、とんでもないことになったよ。

ちようどさ、わたしたちは、嫁姑でたいへんな思いをした迫間（はざま）の世代じゃないか。

◆みなさんのお嫁さんは嫁講には入らなかったんですか？

（H）最後はもうわたしたちの嫁は入らなかった。昔はほら、テレビもなかったし、車もなかったし、出かけることもなかったから、月に一度のヨメコが楽しかったけど、わたしの嫁は車の運転もできるからな。⑤

⑤Hさんの家にお嫁さんが嫁いで来たのが、二十六年前の平成十年（一九九八年）七月。そのころになると、お嫁さんとは価値観が違うし、嫁講に入れと無理強いするのも時代にそぐわないだろうということ

で、Hさんからは強制はしなかったそうだ。

◆みなさんは中年講やおばあさん講には入らなかったんですか？

(H) わたしらがさ、年齢が上がったときは、念仏講や中年講の人たちがいなくなっちゃって(亡くなっちゃって)、けつきよく、ヨメコ(嫁講)だけが残ったので、そのまま「ヨメコ」として、やっていた。

◆いつごろまで続いたんですか？

(H) 中組の嫁講は、わたしが七十歳ぐらい(平成十九年／二〇〇七年ごろ)まで続きました。最後は、わたしたちがいちばん上の世代になっちゃって、下はそうだねえ、五十代ぐらいまではいたかな、人数は十人に減ってしまったな。

若い人もいないし、このまま続けるか、解散するかを全員で話し合って、解散することになりました。

わたしたちがいちばん長くやっていた世代かなあ。若い人も入ってこなくなっちゃったから、わたしたちはずっと「ヨメコ」でした。

「わたしが袋山に嫁いできた(昭和三十三年／一九五八年)ころは、(袋山の)上組・下組には、中年講や、おばあさん講もあったんですよ。

まとめ

途中から聞き取り調査ではなく、話がいろいろ脱線し、同窓会のような雰囲気になってしまった。当時に戻って、楽しそうに話をする三人を見て、嫁講は、農家に嫁いだ嫁たちの数少ない憩いの場というか、唯一、心が休まるかけがえのない風習だったんだなと、感じた。Hさんの「とにかく休めた」というひとことに、当時の農家の嫁たちの苦労が集約されているといえる。

参考文献

- 『袋山の歩み(上)』中島正一(昭和五十五年十一月一日発行・非売品)袋山・大熊氏所蔵
『越谷市史(一)』越谷市役所(昭和五十年三月三十日発行)